

## カフカの作品が語るもの

山 村 哲 二

### 《まえがき》

1919年に、カフカは単行本「田舎医者。短編集」(EIN LANDARZT. KLEINE ERZÄHLUNGEN)を世に出した。そして、この単行本の本扉の裏面に、Meinem Vater(私の父上に)という献辞を添えて彼の父に対する敬愛の念を表明しているのである。

この短編集の中には14の短編が収められているが、以下の論評は、その中の5編の作品にそって、カフカの精神的発展についての考察を試みようとするものである。扱う5編の作品の順序は、単行本「田舎医者。短編集」の中で、カフカ自身が編集した配列順序にしたがった。

なお、この短編集には全部で14の短編が収められているので、これら5編の作品のそれぞれにローマ数字を付して、その短編集全体の中での配列位置を示した。

### 作 品

その(1) Der neue Advokat (新人弁護士) (1917年発表)	第I番目
その(2) Ein altes Blatt (古文書の一葉) (1917年発表)	第IV番目
その(3) Schakale und Araber (ジャッカルとアラビア人) (1917年発表)	第VI番目
その(4) Eine kaiserliche Botschaft (皇帝の綸旨) (1919年発表)	第IX番目
その(5) Ein Bericht für eine Akademie (学会への報告) (1917年発表)	第XIV番目

以下の論評では、まずそれぞれの作品を、骨組みと思われる梗概にまとめて、そののち作品の検討に移ることにしたい。<sup>1)</sup>

### 作 品 (1)

#### 《新人弁護士 Der neue Advokat》

#### 《作品のあらすじ》

われわれは新人弁護士ブツェファルス博士を迎えた。一見したところ、彼がマケドニアのアレクサンドロスの召し馬だった、かつての日々を思い出させるものはない。もちろん事のいきさつに明るい者なら、幾つかのことに気付いている。

おおむね弁護士会の幹部たちはブツェファルスの加入を認めている。かれらは驚くべき洞察で、ブツェファルスが現今の社会体制の中では困難な状況のもとにあり、また世界歴史上の意義にも基づき、いずれにせよ好意的な処遇を受けるのが当然である、というのである。

今は、偉大なアレクサンドロスは存在しない。殺す術をわきまえている者は幾人かいる、また宴会のテーブル越しに槍を友に命中させる腕前にも不足はない。剣は多くのものが下げている。

当時においてさえ、インドの門には到達できなかったが、それでも、それへの方向は大王の剣によって示されていた。今では、門はどこか全く別の、遠い高い所へ移されているのだ。誰一人その方向を指し示さない。

だから、ひょっとしたら本当はブツェファルスがしたように、法典に没頭しているのが一番よいかもしれない。彼は静かな灯火のもと、アレクサンドロスの戦闘の絶え間ない音から離れて、読みものをし、われわれの古い典籍のページをめくるのである。

### 《作品分析》

カフカの作品には、法律関係の用語が多く使われている。これは、彼が法学博士であり、また法律の専門家として日常の業務に携わっていたところから生じた自然の成り行き、と考えるのが妥当であろう。

たとえば、作品名 *Das Urteil*（判決）、作品名 *Der Prozeß*（審判または訴訟）、作品名 *In der Strafkolonie*（流刑地にて）、またこの作品の中の *der Verurteilte*（囚人、または既決囚）、*die Exekution*（死刑執行、または処刑）、作品名 *Vor dem Gesetz*（掟の前、または法の前）、作品名 *Zur Frage der Gesetze*（法の問題）、作品名 *Fürsprecher*（弁護人）、などのように容易に指摘することができるであろう。

とはいうものの、作品の中でカフカが専門的な法律問題を扱おうとしているのか、といえば、それは的を射ていないのではなかろうか。

さて、この作品 *Der neue Advokat*（新人弁護士）にも、同様に法曹としての弁護士を登場させている。

ところで、作品の内容を理解していこう。

新人弁護士ブツェファルス博士が以前アレクサンドロス<sup>2)</sup>の召し馬だった、とは唐突な出だしである。弁護士が以前は馬であった、というのも奇異であるが、ここに紀元前4世紀のアレクサンダー大王が登場するのも、弁護士という現代的な職業名とそぐわない。

そこで、これは明らかに、何かの寓話めいたたとえ話であろう、と察せられる。

以下に、筆者なりの作品の読み替えを試みてみたい。

なにゆえに、このような比喩を用いた作品に仕上げたのか。それはカフカを取り巻いている生々しい現実の事態の進行の中で、差し障りのある表現を回避するため、および作品の中に表現されている骨組みの部分のみ、すなわち作品の精神のみを表現したい、とカフカが望んでいたからだと筆者は考える。

ブツェファルスは、「現今の社会体制の中では困難な状況のもと」にあり、「世界歴史上の重大さ」に基づき、「好意的な処遇が当然」などの点から、筆者にはユダヤ人を想定させるもの、と思われるのである。

召し馬が仕えるアレクサンドロスとは、ユダヤ人にとり、行く先を解明し、かつ導いて行く指導者のような人物、あるいは教えを示しているのではなかろうか。

昔はアレクサンドロスの剣のように、明確に方向を示す目印があったが、今日では誰しもその方向を指し示さない、という表現は、カフカの時代のユダヤ人問題の行く末混沌の状態を言い表しているのではなかろうか。そうした方向を探る論戦、運動の陰でブツェファルスは古い典籍の

ページをめくり、ユダヤ人の来し方行く末を一人思案するのである。

すなわち、ブツェファルスは、法学博士カフカその人の心情と、その姿を形象する人物であろう、と思われるのである。

なお、この時代にはユダヤ人の世界をめぐり、幾多の議論、運動が展開されていたが、その中でヘルツルの著書『ユダヤ人国家』<sup>3)</sup>によって復興させられた政治的シオニズム運動は、1897年8月29日バーゼルで第1回世界シオニスト会議（World Zionist Congress）を開き、以後進展している。しかし、これには反対運動もあり、その他種々の別の運動も存在した。

因みに、カフカは1913年9月ウィーンで開かれた第11回世界シオニスト会議に出席している。また、晩年の1923年8月に第13回会議には参加しようとしていたが、これは病気のため果たせなかった<sup>4)</sup>のである。

## 作 品 (2)

### 《古文書の一葉 Ein altes Blatt》

#### 《作品のあらすじ》

わたしらはこれまで、国の守りなどには、心を煩わすこともなく、それぞれの仕事に従事してきた。しかし、最近のできごととはわたしらを不安にする。

わたしは王宮前の広場の靴屋である。近頃この広場へ通ずる道路の入口がすべて匈奴の兵士たちによって占められているのだ。毎朝かれらは多くなっているようだ。野営で寝泊まりしている。かれらは住居を嫌うのだ。剣を研ぎ、鍔をとがらせ、馬の訓練に励んでいる。広場を厩にしてしまった。わたしらは汚物だけでもせめて片づけようとするのだが、そうすることも次第にまれになる。骨折りがむだであるし、荒馬たちのあいだに入っていくとか、または鞭で怪我をさせられるとかの危険にさらされるからだ。

匈奴とは意志が通じない。言葉が通じないし、かれらはおのれの言葉をほとんどもっていない。かれらは互いには鴉のような声で了解しあっている。

わたしたちは、かれらがわたしたちから必要なものを取るのを、好きなようにさせている。というのは、向かいの肉屋の例を知っているからだ。肉屋は商品運び込むや、奪われ食べられてしまうのだ。かれらの馬さえも肉を食う。肉屋は肉の提供を打ち切る勇気がない。わたしたちも金を出し合って彼を援助している。肉が手に入らなければ、かれらが何をしようと思いつくか知れたものではない。この間肉屋が、生きたままの牡牛を連れて来た。思い切ってわたしが外へ出て見たのは、あたりが静かになってからすでに久しかったが、かれらは食い飽きて牛の残骸の回りに横たわっていたのだ。

その時わたしは王宮の窓の中に皇帝を見たように思った。窓際に立って、頭をたれ、王宮の前のできごとを眺めているように、少なくともわたしには思えたのである。

皇帝の王宮は匈奴を誘っておいて、かれらを再び追い出すすべを知らない。わたしたちは、一体どんなに永くこの負担と苦痛に耐えるのだろうか。わたしらのような商人や職人に祖国の救済が委ねられている。しかしわたしらはそのような任務に堪えられない。またそんなことができるかと自慢したこともない。それは誤解だ、そして、誤解のためにわれわれは破滅するのだ。

## 《作品分析》

この作品は、寓話的に比喻を用いてユダヤ人の社会情勢を表現している、と読むのが妥当ではなかろうか。「わたし」、とか、「わたしら」というのは、ここではカフカの父ヘルマン・カフカのような商人や職人を表現しているのだろう、と筆者は判断する。

第一次世界大戦の窮状を避けて、多数の東ユダヤ人たちがヨーロッパに流入して来ていた。ここではそのような社会情勢を描写しつつ、東ユダヤ人のもつ意味をこの戦時下のみに限定せず、さらに敷衍しているのではなかろうか。

匈奴、という表現は東ユダヤ人たちを言い表わしているのではなかろうか。

避難民の東ユダヤ人たちについては、カフカは一種困惑した気持ちを抱いていたようである。意志が通じない、したがって善意も、である。

カフカは日記の中に、次のように書いている。<sup>5)</sup>

「ガリチアからの難民に古い下着や衣料品を分配している織物小路へ行く。マックス、プロート夫人、<sup>6)</sup>ハイム・ナーゲル氏。—（略）—

ルスティヒ夫人は一枚の子供服を探すのにあまりにも長い時間をかけたので、プロート夫人に怒鳴りつけられる。『さあもういい加減にこれをお取りなさい、そうでないと何も手に入りませんよ。』しかし、彼女はそれよりもっと大きな声を張り上げて応答し、大きく荒々しく手を動かして終りにする。『善行の方がこのぼろ切れ全部より値打ちがあるというんでしょうよ！』（1914年11月24日）

マックス・プロートによると、「何回かの討論の夕べを通して東西間の相互関係を明瞭にするために、シオニストたちは、プラークに東ユダヤ人の戦争難民たちがいる事実を利用したのであった。当然、最初は多くの誤解が存在したが、のちにはしかし実り豊かな協力と相互の影響も生まれた。」という。<sup>7)</sup>

次は、その「討論の夕べ」に出席したカフカの感想である。<sup>8)</sup>

「東ユダヤ人と西ユダヤ人の夕べ。当地のユダヤ人に対する東ユダヤ人の軽蔑。この軽蔑の正当さ。東ユダヤ人は十分にこの軽蔑の理由を知っているが、西ユダヤ人はまったく知らない。たとえば母が彼らに接近する際に抱いている、ひどい、愚の骨頂ほどの見解。マックスでさえスピーチが意を尽くせず無力であることが気になって、上着のボタンをはめたり外したり。それでもここにはこの上ない善意がある。」（日記：1915年3月11日）

作品の中でカフカが「匈奴とは意志が通じない。」と書いているのは、このあたりのことをいっているのであろう。匈奴が、肉屋に与えられた生きたままの牛を食い殺して、食い飽きた末に、ごろごろと横たわっている、という表現は、食いがきたなくて見境がない、人間としての誇りがなく、など彼らの常識や品性のなさを誇張したものではなかろうか。

皇帝の王宮とは、ユダヤ人問題の解決も含めて、この世を統べ、かつ未来を指し示し導くもの、ほどの意味であろう。

皇帝の王宮は、避難民に緊急の避難場所を示しながらも、その後の実生活には施す術を知らない。

彼らの生活の世話をさせられるのは、宗教生活の我を折って、商人、職人などの生活に明け暮れしている、たとえば父ヘルマン・カフカのような同化ユダヤ人たちだ。

「わたしたちは、一体どんなに永くこの負担と苦痛に耐えるのだろうか。」「誤解のためにわたしたちは破滅する。」、とカフカは父たちの心境を代弁しているように思われるのである。

### 作品 (3)

#### 《ジャッカルとアラビア人 Schakale und Araber》

#### 《作品のあらすじ》

「わたし」たちはオアシスに宿営した。仲間のアラビア人たちは眠っていた。「わたし」は眠れないまま草の上であおむけになった。遠くで鳴いていると思っていたジャッカルがいつの間にか、わたしのまわりを取り囲んでいた。そのうちの一番年をとった一匹が話した。長い間わたしを待っていた、どうかジャッカルとアラビア人たちとの積年のいさかいに決着をつけるために、仕事をしてくれというのであった。わたしの手を使ってこの鋏で連中の首を切り落としてくれ、と錆びた裁縫鋏を歯にくわえてきたのである。

すると突然、「さー、とうとう鋏が出てきた。これでおしまい」と、そっとしのびよって来ていたわれわれのキャラバンの案内人のアラビア人が叫び、大きな鞭を振り回した。ジャッカルたちは散り散りに逃げたが、ある程度の距離まで行くとうずくまってこちらの様子をうかがっているのだった。案内人のアラビア人はジャッカルたちのこのいつもの習性を知っていたのである。

「ヨーロッパ人なら誰でもこの鋏を使って大仕事をしてくれと頼まれる。馬鹿な希望をこの連中は抱いているのです。正真正銘の馬鹿です」と、アラビア人は言って、人夫たちに一匹のラクダの死体をそこに運ばせた。すると途端に、うずくまっていたジャッカルたちが、アラビア人をも憎しみをも忘れて、その死体に魅せられて地面をはうように近寄り、ついには噛みつくのであった。このとき案内人は鋭い鞭でかれらを縦横無尽に打つのである。ジャッカルたちは鼻ずらに鞭を感じると引き下がるが、ラクダの血の湯気に逆らえずに、またそこに来る。わたしは案内人の腕をつかむ、するとかれはいう。「ごもっともだ、旦那。やつらに仕事を勝手にさせましょう。それにもう出発する時間だ。素晴らしい動物じゃありませんか。それにやつらが何とわれわれを憎んでいることか。」

#### 《作品分析》

この作品ではジャッカルはユダヤ教徒を、アラビア人はキリスト教徒を、ともに宗派を越えて大まかに表現したものと、読むことができるのではなかろうか。

ヨーロッパ人とは、ヨーロッパ人、その中でも殊にキリスト教徒、の意味だと思われる。

この作品をカフカは、マルティン・ブーバー編集の月刊誌《ユダヤ人》に発表した。ユダヤ人としての、何らかの一体感をもっている雑誌に発表したのである。

ジャッカルはアラビア人との積年のいさかいに決着をつけるため、「わたし」に手を貸してくれという。積年のいさかいとは、ユダヤ教とキリスト教との関係、抗争や弾圧の歴史を物語っているのではなかろうか。それに決着をつけることを依頼される「わたし」は、ヨーロッパで苦勞の挙げ句、今や生活基盤を確立しているユダヤ人。けれどもそのような難問に応ずることはできない。自分一個人の生活を築き上げるだけでも一大事だったし、今後もその維持は容易ではなかろう。ましてやユダヤ人全体の問題などに関わるのは無理である。

アラビア人はジャッカルの自分たちに対する憎しみも、ジャッカル弱点をも承知している。ジャッカルは食うものに飢えている。食えるものは、それがたとえ汚れたものでも、誰からもらったものでも平気で食べるのである。そこには、食うために恥も誇りもない、といったジャッカル性格が現れているのである。たとえ鞭で打たれながらも食う。

カフカは宗教の純粋さを追求するあまり、別の側面から人間として破壊されていくような、東ユダヤ人の一部宗教界を批判的に描き出したかったのではなかろうか。

しかし、それにもかかわらず、「わたし」という人物は、ジャッカルを鞭打つアラビア人の腕をつかみ、やはり、誠意からの宗教心の持ち主であるジャッカルを守ろうとするのである。ここには一時期のカフカには身におぼえのある、ハシディーム（ユダヤ教敬虔派）の奇跡ラビを訪問したときの<sup>9)</sup>、畏敬と困惑の入り混じったカフカ自身の複雑な気持ちに、一脈通ずるものがあるといえるのではなかろうか。

#### 作 品 (4)

##### 《皇帝の綸旨 Eine kaiserliche Botschaft》

##### 《作品のあらすじ》

伝説によると、皇帝が、孤立した人物、哀れな臣下、皇帝の太陽からはるかな隔たりへ、ささやかに隠れた人影の、そのきみに、臨終の床からある重要な知らせを送った。彼は使者を床の脇にひざまずかせて、その知らせを耳にささやいた。その知らせをひどく気にかけていたので、皇帝はさらにそれを自分の耳に繰り返し言わせてみた。うなずいて彼はその繰り返しの内容が正しいことを確認した。崩御を見守るすべての人たちの前で彼は使者を出発させた。使者は疲れを知らぬたくましい男である。群衆をかき分け、開けた野に出れば飛ぶように走り、彼はきみのところに行くだろう。しかし、彼はまだ宮殿の一番内側の室から室へと通り抜けている。決して彼はそれをやりおおせることはないであろう。それが終わったとしても、まだ階段が、そして中庭が、第二の宮殿が、再び階段が、中庭が、またまた宮殿が、と数世紀にわたってつづく。そして、とうとう大手門から飛び出したとしても、——しかし、そんなことは決していつまでも起こりえないのだが——、彼の前にはやっと王宮の都がひろがっているだけだ。くずがいっぱいに盛り上げられた世界の真中だ。誰もここを突き抜けることはない。ましてや、死者の知らせを持ってなどあり得べくもない。

夕べが来ると、しかしきみは、きみの窓辺にすわって、その知らせを夢見てあこがれるのである。

##### 《作品分析》

この作品の中の「きみ」とは、カフカが見たわが身のカフカのことであろう。

皇帝からの重要な知らせが、遠く隔ててささやかに隠れている「きみ」のところへやって来るのを、「きみ」は、ほとんど不可能だと思いつつもなお待っている。

皇帝からの重要な知らせ、これは、ユダヤ人問題に頭を悩ます者に救いとなる、何らかのよい知らせ、何らかの解決策、を意味しているのではなかろうか。それを「きみ」は待っているのである。

くずがいっぱいに盛り上げられた、ここ世界の真ん中など誰も突き抜けることはない、とは、多種多様な問題を抱える現実の世界の中で、ユダヤ人にとっての好意的な世界の展開など望みはない、といっているように見える。

死者の知らせ、とは、死んだ皇帝からの知らせ。すなわち、かつては多くの信者とともに、確固と世界に君臨していたユダヤ教の中枢からの、遠い今の時代への知らせ、ほどの意味ではなからうか。

その知らせは、現今のヨーロッパ世界の情勢と両立しにくくなってきている伝統的なユダヤ教の生活や教えと、どのようにつながるのであろうか。そのような悲観的な展望の中でも、「きみ」はその望みを捨てようとせず、その知らせをはかなく夢見て待っている、といっているように読めるのである。

さらに、ここにはユダヤ人の生活や教えが好意的に受け入れられる時代状況の到来を、夢見て待つのである、という意味も読みとることができるのではなからうか。

カフカがこれを世に出したときは、すでに大戦が終わり、世界も大きく変わっていた。オーストリア・ハンガリー帝国は崩壊し、チェコスロバキアは独立した。しかし、ユダヤ人にとっての事態は好転したというわけではなかった。ユダヤ人にとっての世界は、シオニズム運動もふくめて、ますます行く先が混迷の状態のままである。カフカはユダヤ人のさまざまな実状と悲観的な将来的展望に照らして、一体これからのユダヤ人はどのように生くべきか、との悩みについて『皇帝』の裁決を仰いでいたのではあるまいか。

カフカ個人はどうか、といえば、彼は身の若いユダヤ人たちに対して、解決策としてかなり明確に、シオニズム運動に眼を向けさせていたようである。たとえば妹の OTTLA に対して、若い MINZE EISNER や ROBERT KLOPSTOCK などに対して、シオニズム運動に参加させようとしていた。また自分も、病気で実現しなかったとはいえるものの、パレスチナを視察する計画を抱いていたし、またヘブライ語も勉強し始めていたのである。<sup>10)</sup>

#### 作 品 (5)

##### 《学会への報告 Ein Bericht für eine Akademie》

##### 《作品のあらすじ》

ほぼ5年の歳月が、猿であった時代から「わたくし」を引き離しています。5年はカレンダーでは短い時間ですが、わたくしにとっては、卓越した人の指導や助言を受けつつも、地球上にこれ以上の生徒はいないと思われるほどの熱中ぶりで駆け抜けた、ほとんどひとりぼっちのはてしなく長い時間だったのです。何故ひとりぼっちかといえば、まわりの助言や伴奏などというものは、柵のはるか彼方のものだったからです。

いずれにしても、かつての猿が人間の世界に入りこみ、腰を落ち着けることになった道筋を述べることは、きっともし現在わたくしがゆるぎない自信を持ち、文明世界のすべての一流演芸場で不動な地位を確立しているものでなければ、できなかったでしょう。

わたくしは黄金海岸で狩猟探検隊によって捕獲されました。弾を食らったあと、汽船の中甲板に置かれた檻の中で正気に戻りました。檻といっても3面の格子が木箱に取り付けてあって、つまり木箱が4番目の壁になっているのです。天井が低くて立つに立てず、幅がせまくて座るに座

れず、わたくしは曲げた膝をがくがくさせながら、中腰になっていました。

わたくしは生まれてはじめて、出口なしの状態におかれたのです。これまでは幾らでも出口があったのに、今は一つもない。しかしどうしても出口を作る必要があった。そこでわたくしは猿であることをやめました。

わたくしが求めたのは自由などではありません。求めたのは出口にすぎません。わたくしが人間同様になったら、格子を引き上げてやるとは、誰が約束したわけでもありませんが、出来そうにないことが達成されてみると、初めは望んでも詮なかったそのことに約束がおくればせに結ばれる、ということにもなるものです。

こうしてわたくしは、とくと彼ら人間を観察した挙げ句、人間の仲間入りをする勉学に励みました。わたくしが人間のまねをしたのは、出口を求めたからでほかに何の理由也没有ません。

わたくしはここで自分の前にある二つの可能性に気がきました。動物園か、演芸場かです。わたくしは自分に言い聞かせました、演芸場をめざせ、それこそが出口だ、動物園は新しい檻にすぎぬ、そこへ入れば身の終わりだ、と。

とにかく大勢の先生を酷使しました。最初の先生は猿なみにおかしくなってしまう、授業を放り出し神経科に入院する羽目になりました。しかし、かつて地球上に繰り返されたためしのない努力を通じて、わたくしはヨーロッパ人の平均的な教養をわがものとししました。そのこと自体は多分無にひとしいでしょうが、やはり何事かではあるといたいのです。そのために、檻を出ることができ人間という出口を見つけることができたからです。

わたくしの到達点を見渡すとき、わたくしは愚痴をこぼす気もなければ、満足にひたってもおりません。総じて自分が得ようとしたものを得たといってよいでしょう。

ついでながら、わたくしはどの人間の批評をも望んではいません。願っているのはただ知識を普及させることだけなのです。学会の先生方にもただご報告申し上げたに過ぎないのです。

### 《作品分析》

この作品はカフカがユダヤ人としての自己の現在の位置、あるいは心境に到達するまでの、精神的な発展過程を、心理分析的にたどり、整理してみたものと思われる。

文中の「わたくし」とは、カフカ自身と読んでよいであろう。この作品が初めて現れたのは1917年10月である。猿であった「わたくし」が、猿であることをやめてから今までにはほぼ5年の歳月が経過している、という。そこでこの数字を、仮にそのまま逆算すれば、猿であることをやめたという時期は1912年のころのことであったということになるのである。<sup>11)</sup>

ところで、カフカにとって1912年という年は、いわばユダヤ人としての自己の目覚めの年ともいえよう。前年の1911年10月に当時のポーランドからやって来たユダヤ劇団との接触が著しい契機となって以来、自己の置かれたユダヤ人としての社会的地位に再検討を加え始めたのである。その結果、カフカ29歳の1912年には、作品「判決」、「アメリカ」、および彼の最高の作品とも評される「変身」などを書いた。<sup>12)</sup>

したがって、先に、仮にとして、1912年という年を「わたくし」が猿であることをやめた年と計算したが、これはカフカ自身の経歴とちょうど符合していることになるのではなかろうか。

そののち、彼は作品の出版や公開朗読などの彼なりの作家としての方向を固めていくのである。



この作品の中の猿とは、保険会社の職員としての束縛の強い時期のこともふくめて、ユダヤ人としての自覚ある生き方にまだ目覚めていなかったころの自分のことを表現しているものと思われる。

「わたくし」は現在、文明世界のすべての一流演芸場で不動の地位を確立している、としているが、これはカフカの作家としての確信を表現したものであろう。

また、「わたくし」は捕獲され檻の中に入れられた、という表現は、法学博士の学位を授与され、給与生活者としてかなり恵まれた条件のもとで勤務していたにもかかわらず、なおカフカが自己個人の境遇を超越して広くユダヤ人一般についての悩みを悩んでいたがために感じていた圧迫感、束縛感のことをいっているのであろう。いうならば、このような状況下にあっては、ユダヤ人はユダヤ人としての意識が強ければ強いだけ、またユダヤ人のことを思えば思うだけ、それだけユダヤ人を取り囲む周囲の状況の厳しさに気付く結果になるのであった。

猿の「わたくし」は、その檻からの出口を動物園ではなく、演芸場に求めたのであった。これは、ただのありのままでいるよりも、積極的に打って出る方を選んだ、という意味にもなろう。かくて、「わたくし」はかつて地球上に繰り返されたためしのない努力を通じて、ヨーロッパ人の平均的な教養をわがものとし、檻を出ることが出来、人間という出口を見つけることができた、というのである。

「人間」とは平均的な教養を身につけたヨーロッパ人、というほどの意味であろう。「わたくし」はこの努力を、とくと彼ら人間を観察した挙げ句、達成したのである、とその道程が披露されている。

さて、「わたくし」は、ヨーロッパの平均的な教養をわがものとした、がそのこと自体は多分無にひとしいでしょう、といっているし、どの人間の批評をも望んでいません、願っているのはただ知識を普及させることだけなのです、とまとめているのである。

ところで、この単行本「田舎医者」の最後を飾るべきこの作品の、この最後のまとめのことは、同時にこの単行本全体のまとめのことばとなるはずのものである。「わたくし」自身がヨーロッパの一流演芸場で不動な地位を確立したとしても、「わたくし」は満足にひたっているわけではない。

ここで「わたくし」はユダヤ人に対して、ユダヤ人自身の目覚めを促しているのである。これはユダヤ人に自己の置かれた位置を認識させることのために、わたくしは知識を普及させたいのです、と言っているカフカ自身の声のように思われるのである。

### 《あとがき》

この短編集「田舎医者」の標題には、著者カフカにより「父上に」との献辞が添えられている。

これは、工場経営にも協力することができず、父親の期待に反した道を進んだ息子カフカが、単行本を世に出すに際し、同じく苦境にある「一人のユダヤ人同胞」としての父親カフカに寄せた、誠意と敬愛の情の、真心をこめた意志表示である。

また総じて、これまで検討してきた5編の作品は、ユダヤ人の窮状および行く末を深刻に案じている作者の姿を浮き彫りにしている、と筆者には思われるのである。

## 註

- 1) 翻訳はカフカ全集（全12巻），新潮社，1980年，を参考にした。
- 2) アレクサンドロス（Alexandros）3世（356-323 BC.）（在位336-323 BC.）アレクサンダー大王，古代マケドニアの王。父はフィリッポス2世。ギリシャの哲学者アリストテレスを家庭教師としてギリシャ文化の教養を積み，父王のあとを継ぐ。  
BC. 327-325年にはインドのパンジャーブ地方に遠征したが，土着民の反抗に会い，兵士もこれ以上進むのを拒んだため，バビロンに帰り，ここで熱病に倒れた。彼はアジア・ヨーロッパにまたがる大帝国を建てた。
- 3) Theodor Herzl（1860-1904）ブダペストでユダヤ人を両親に生まれる。第1回から第6回まで世界シオニスト会議の議長として活躍した。世界シオニスト会議は彼の死後，1946年の第22回大会までつづけられた。なお，彼の著書『Der Judenstaat（ユダヤ人国家）』は1896年2月に刊行された。
- 4) Binder, Hartmut. Franz Kafka -Leben und Persönlichkeit -. Stuttgart : Alfred Kröner Verlag, 1983. S. 481.
- 5) カフカ全集（全12巻），新潮社，1980年，第7巻，317ページ。
- 6) 前掲書，497ページ。日記原文の編者マックス・ブロートの母親のこと。
- 7) 前掲書，498ページ。日記原文の編者マックス・ブロートによる註より。
- 8) 前掲書，333ページ。
- 9) 前掲書，342ページ。
- 10) Binder, Hartmut. 前掲書，481ページ。
- 11) カフカのこの作品には後日譚が付けられている。それは，作品中に登場する「先生」の，この作品を読んだ感想文という形式になっているが，その「先生」の感想文の中でも，この5年という数字がくり返されている。このことはあたかも5年という歳月を再確認しているかの如くである。
- 12) 作品中での，「動物園を」ではなく，「演芸場の方を」目ざしたという表現は，このことを，すなわち「世に小説を発表すること」を表現しているのである。同時に，「動物園」とは，自分の一市民としての生活を示し，それは不自由なありのままの自分の姿を世間に曝すだけである，というカフカの認識を表現しているのである。

（1994. 11. 記）